

聖霊降臨節第 22 主日 説教 「ああ、信仰薄き者たちよ」要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2021 年 10 月 17 日

マタイによる福音書 6:25~34

10 月に入り、毎朝のルーティンが一つ増えました。それは、NHK の BS 放送で「マー姉ちゃん」の再放送が始まったからです。40 年以上前に放映された朝ドラですが、サザエさんの作者である長谷川町子さん一家の屈託のなさが一日を始めると当たって力を与えてくれるからです。中でもそのお母様の大きさが目を引くところでもあります。そのお母様がここぞというときに仰ることが、今日、私たちが最初に聞いた「汝思い煩うことなかれ」とのイエス様のお言葉です。ですから、この十日ほどの間、朝ドラを見ながら思っていたことは、この日の説教のこともありました。ただ、そのような私のあり方について、皆さんはどのように思うのでしょうか。いいか悪いかと言えば、どちらかということでもあります。そこで、今日、イエス様が最初に仰っていたことを確認いただきたいのですが、そこにはこうあります。「自分の命のことで何を食うか何を飲もうかと、また、自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな」と。つまり、ここ数日の間に私がしてきたことは、「何を食うか、何を着ようか」と「思い煩っていた」ということで、従って、それが明らかである以上、私がしてきたことは明らかな間違いであったということです。しかも、それは、ここ 2 週間に限ったことではなく、牧師としての召命を受けてからずっと続いていることでもあります。

ですから、そのように心がけが悪いわけですから、いついかなる形で雷が落とされたとしてもおかしくはありません。しかも、説教というものが私たちの救い、命に関わるものでもあるわけですから、ますますもって堂々と大らかな気持ちでその準備に当たることができるはずですし、そうでなければならぬはずだからです。けれども、実情はどうか、そこで多くの牧師が当たり前のように語ることは、「説教準備は命がけだ」ということです。それゆえ、多くの牧師家族にとって、土曜日の夜は修羅場と化すことにもなるのですが、ただ、すべて

がそういうわけではありません。堂々と大らかな気持ちで土曜の夜を過ごす牧師はいるにはいるのです。けれども、その数はそう多くはありません。ですから、長谷川町子さんのお母様がその姿をもし見たなら、「汝思い煩うことなかれ」と言って笑い飛ばされもするのでしょうか。そして、これは私の場合、この「汝思い煩うことなかれ」とのイエス様のお言葉を思い出すのは土曜の夜だけではありません。毎週、少なからず二度三度と必ず思い起こさせられるものですが、それは、人からどんなに笑われても、またどれほどこっぴどく怒られようとも、思い煩いから解き放たれることはないからです。ですから、なんともどうしようもない次第ではありますが、けれども、またそうであるからこそ、イエス様の最後の言葉が「身に染みる」のです。

イエス様はそこでこう仰っております。「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である」と。それゆえ、思い悩んでいる最中にこの言葉を思い出すと、「なるほど」とそう思わされますし、一瞬、肩の荷が軽くなったようにも思えるのです。そして、それは、錯覚や思い違いではなく、毎回毎回ではないのですが、確かに軽くなるのです。ですから、イエス様が仰ることは間違いではありません。ところが、100 回の内 99 回はどうかといえば、なるほどと思いながら床についても、一晩寝て目を覚ましてみると同じことを思い出してしまふ始末なのです。それどころか、空の鳥の鳴き声を聞いて、朝が来たことを知らされたことがこれまで何度あったかとも思います。けれども、それが私たちが思い煩うということでもあるのです。それゆえ、それは牧師の説教準備に限ったことではありません。そこかしこに見受けられることであり、まただから、イエス様は「命のことで」思い煩うなと仰るのです。けれども、「命のことだからこそ」私たちはどうしても思い煩ってしまうわけです。

私たちはなぜ思い煩い、どうして思い悩むのでしょうか。それは、私たちがそれだけ一生懸命に毎日を生きているからです。つまりは、私たちがそれだけ本気で真剣に生きているからでもあります。それも逃れようにも逃れられないところに身を置いているから、だから、私たちは思い悩むのです。まただからこそ、一生懸命にならずにはいられないのですが、ただ、一生懸命であればあるほど、特に、物事が空回りし、うまくいかないときなどはそうですが、一生懸命さが返って仇となって思い煩いを深めていったりもするのです。中でも、力もなく、知識もなく、経験もなく、すべてがないないづくしの状況の中での一生懸命さは、私にも覚えがあることですが、さらに身をすり減らすことにもなるのです。ですから、そんなとき、「思い煩うな」とイエス様におっしゃっていただいてホッとしたりもするのですが、けれども、翌日になると、その思い煩いがさらに大きくされていったりもするわけです。そして、正直申せば、それが私のこれまでの信仰生活であったわけですが、まただからイエス様のお言葉が「身に染みる」と申し上げたわけです。

イエス様に「思い煩うな」と言われても、私たちが「思い煩い」から解放されることはありません。ですから、イエス様がここで仰っていることはできないことを私たちに求めているとも言えるのでしょう。しかし、イエス様がここで「命のことで思い煩うな」と仰るのは、私たちを追い詰めるためではありません。ですから、この点は先ずしっかりと心に留めたいのですが、それは、イエス様が仰りたいことは、できるかできないか、するかしないかではなく、ある意味でする必要のないことを私たちがしているということです。だから、イエス様は「信仰なき者よ」とは言わずに、「信仰薄き者よ」と仰るのです。従って、「思い煩うな」と仰っていることは、私たちがそれを「するしない」、「できるできない」ということをイエス様が問題にしてはいないということです。私たちがどうして思い煩ってしまうのかということであり、そして、その答えは今日のお言葉の直前にイエス様が仰ったことの中に明らかにされていることでもあるのです。それは、「あなたがたは、神と富とに仕え

ることはできない」とのイエス様のお言葉です。つまり、思い煩いは、私たちが神様以外のものに仕えているからで、ですから、それは、富や名誉だけに限ったことではありません。私たちが価値を見出すものすべてです。自分をよく見せよう、見てもらいたいというのもその一つであります。つまり、思い煩いは言うなれば、自分自身の思いや考えへの拘り、それが自分の中で神様以上に大きな位置を占めているということです。ですから、私が「マ一姉ちゃん」のお母様のあり方を見ていて気持ちがいいのは、物事を値踏みするかのようにこれかあれかという所で信仰を捉えてはいないところです。これしかないというところからこの世の一切を見ているということです。

ただ、このように申し上げると、それは特別な人の話と思う方もいることでしょう。けれども、今日の教会はそういう方々のそうした信仰、そうした働きを通して築かれたものであり、そもそものところと言えば、私たちの先達もそれと同じところに立って教会を築いてこられたのです。それは、このイエス様の「汝思い煩うことなかれ」とのお言葉が示すように、この信仰に立てばこそ私たちの将来は開かれていくことにもなるからです。そして、それが私たちが「聖書的」「信仰的」と呼んでいるものの中身でもあります。ですから、もし私たちが自分自身の将来、教会のこれからについて思い煩い、悲観するだけであるなら、それがどんなに誠実な仮面を被っていたとしても、それは、私たちがどこか思い違いをしているということです。けれども、もちろん、私たちはそうではありません。この日の礼拝の後、私たちは、牧師館及び園舎の建築について懇談会を開くわけですが、それが私たちにとっての長年の祈りの課題であるからです。ですから、そこで忘れてはならないことは、このように祈った結果は、それがすべて神様の御心であるということです。ただし、その時々々の決断は時代にそぐわなくなることもあります。そのため、将来的にこの祈りの結果を受け入れ難く感じることもあるのでしょうか。けれども、私たちが決してしてはならないことは、御心だと信じたことを御心ではなかったように言うことです。なぜなら、祈った結果が御心であるのは、そこに聖霊の働きが

豊かに与えられているからです。それゆえ、そこに後悔や、それこそ過去を振り返るだけの悪戯な反省もありません。

ただ、そこでもしボタンをかけ間違えたままにいたとしたら、いくら真剣に一生懸命にこの大きな課題に取り組んだとしても、求める答えが見つかることもありません。ですから、もしボタンをかけ間違えているなら、正しい位置にボタンをかけ直さなければならぬのですが、つまりは、それが富ではなく、神であるということです。まただから、イエス様も「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい」と仰るのですが、では、私たちが何よりも先に求めなければならない神の国、神の義とは何なのでしょう。人はよく自分の発したその言葉によって迷路に入り込むと言われますが、ただ「神の国、神の義を求めよ」と繰り返すだけでは、余計に迷路に入り込むだけなのでしょう。ですから、そういう意味では、この「汝思い煩うなかれ」というこの言葉も同じです。イエス様のこのお言葉をするしなない、できるできないというところで理解しようとするとき、私たちが途方に暮れてしまうのはそのため、それゆえ、私たちがもしこの迷路にはまり込んでいるなら、そこから抜け出してイエス様のこのお言葉に真摯に聞いていかなければならぬのですが、では、どうすれば、私たちがこの迷路から抜け出すことができるのでしょうか。

そこで、思い出していただきたいことは、少し前に説教の中で申し上げたことです。イエス様は度々「なになにするなかれ、なになにするな」と仰るのですが、その場合のイエス様のご命令は、するしなないということ私たちに求めるのではなくて、「あなた方がそれをするはずはない」との信頼に基づいて語られているものでもあるのです。ですから、「汝思い煩うことなかれ」と仰ることは、意味合いとしては「あなたがたは思い煩うはずはない」ということです。つまり、できるからいい、できないから悪い、そういうものではなく、そもそもその必要もないし、そうあるはずもないということ私たちがしてしまっている、このことを誰でもないイエス様が私たちにそう仰っているということです。ところが、そうであるにも関わらず、私たちは思い悩み、思い煩ってしま

う、それは、私たちにその力がないからでもなく、もちろん、私たちがいい加減でだらしないからでもありません。「マー姉ちゃん」のお母様のように神様と神様の御言葉の上にしっかりと立ってこの世界を見るのではなく、神様以外の、自分が心引かれるものの上に止まり、そこから自分の欲しい答え、望む答えを導き出そうとしているから、だから、私たちは思い煩ってしまうのです。つまり、立っているところが間違っているということでもあります。ただ、それとて全部が全部悪いばかりではありません。神様の上に、神様のお言葉の上に、イエス様のように立とう、立ちたいと「思い煩う」こともあるからです。

では、その場合の「思い悩む」ということはどういうことなのでしょう。ここで、私はこう考えるのですが、思い悩むということには、もう一つのまったく別な意味があるということです。それは、神様の御心が豊かに働く空間、余裕を生み出そうとして私たちがジタバタ足掻くということでもあります。それは、この余白を生み出そうとして私たちが足掻けばこそ、私たちの信仰は生き生きとしたものとされるからです。そこで、親しいプロの画家よりどういう絵が下手な絵のかをじっくり教えていただいた時のことを思い出しますが、下手な絵というのは余白がないのだそうです。それは、自信もなく、技術もないために、キャンバスのすべてを自分の思いのままに埋め尽くそうとしてしまうから、いや、そうするしかないから、だから下手な絵しか書くことができないのですが、ただ、それは絵に限ったことではありません。説教然り、私たちの人生然り、すべてに当てはまることでもあります。特に、自分ではどうすることもできないことについてはなおさらのことです。余白を残すことがいかに難しいか、ですから、そういう意味で言えば、信仰の達人も人生の達人も一人もいません。

余白が生まれるということはどういうことなのでしょう。それは、そこに真の意味での出来事が生じるということです。そして、私たちが神を見るのは、まさにこの余白においてのことでもあります。ですから、思い煩う必要のない私たちが思い煩うのは、そういう意味では、私たちが信仰的に未熟であるからで

もありますが、それは、一方では、まさに神様が豊かに働いてくださるための余地、この余白を生み出そうとしてジタバタ足掻いているということです。だからこそまた、本来は必要がないことをしているとの気づきが私たちをして自分がどこに立っているのかを知らしめることにもなるのです。ですから、そのために私たちに求められることは、聖書の御言葉を鼻で笑うことではありません。できもしないことと、やってもやらなくてもいいことと、自分勝手に整理して分かりやすいところで受け止めようとするのではなく、ジタバタ足掻きながら、自分自身の中に神様が生き生きと働く場を用意することなのです。ただ、それは、とても辛く苦しいことでもあります。しかし、我が身にその苦しみを引き受け、そこに生きようとするからこそ、私たちは自分でも気がつかない形で内なる神様の働きを経験することにもなるのです。

何も変わらないし、何もできない、けれども、イエス様のお言葉には慰めがある、そして、それは、百回に一回のことである。ただ、百回に一回ということでは、後の九九回は苦しいだけということでもあるのです。まただから、イエス様の慰めはそれだけにまた身に染みるのです。そして、信仰に生きるということはそのようなことであり、まただから、神が富かの前に立って感じたこの「身に染みる体験」が、私たちをして、神様が示されるものをこれしかないと思わしめ、敢えて私たちは損だと思おう方を選ぶのです。ですから、イエス様が十字架を我が身に引き受けられたように、そこに痛みが伴わないはずはありません。従って、信仰に生きるということは、神様を感じ、一時気分が晴れればそれでいいということではありません。神様をただ感じるだけで終わるのではなく、神様と共に生き、イエス様と共にこの世にあって働く、それが私たちの信仰というものなのです。そして、このことは、また、別の見方をすれば、「時を待つ」ということでもあるのです。なぜなら、イエス様がここで「何よりも先ず神の国と神の義を求めなさい」と仰ることは、まさに、「時を待つ」ことでもあるからです。

コヘレトの言葉の3章に「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められたときがある」とあり、そして、生

まれる時、死ぬ時、と、そこには私たちがその生涯において経験するであろう様々な「時間」が記されています。そして、そこで示される「時」とは、ある意味で運命を前にして私たちがいかに無力であるかを物語っているとも言えるのでしょう。私たちの人生においては、抗うことのできない事態に度々見舞われることがあるからです。けれども、御言葉が語る「時」とは、私たちと神様とを引き離すために働く分けの分からない力のことではありません。なぜなら、生まれる時も死ぬ時も、時を備えるのは神様であり、まただから、御心によってふさわしい時が与えられるそのとき、私たちは確かな神様との繋がりを見出すことになるのです。ですから、イエス様が今日の最後のところで「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」と仰るのは、明日というその「時」は、神様が備える、神様の御心の内にあるものでもあるからです。

このことはつまり、私たちの「思い煩い」の根底にあるものは、私たちだけの問題なのではなく、神様にとっても大問題であり、そして、この大きな問題を私たちと共に担わせるために、神様はイエス様を私たちのもとにお遣わしになったのです。まただから、私たちは「時を待つこと」ができるし、また、神様とイエス様との繋がりを信じて、神様に喜ばれる働きを共になすことができるのです。そして、それが私たち藤沢教会であり、この神様との交わりの中に多くの人々を招いてくださっているのが私たちの神様でもあるのです。従って、先達が築いたこの信仰の上に新たな歴史を築く使命に与っているのがこの日「思い煩うな」と語りかけられている私たちでもあるわけですから、そのためにも、この日のイエス様のお言葉の上にとしっかりと立ちたいと思うのです。あたふた、ジタバタしつつ、神様が豊かに働くことのできる場所を用意し、うめきつつも共々に祈りを合わせ、自分自身を神様に献げ続ける私たちでありたいと思います。祈りましょう。